科 目 名	子どもとアート論		副題		
担 当 者	安村　清美・斉木　美紀子（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	前期	単位数	２単位	配当年次	１・２年次
授業の概要	子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに、実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。 安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。 斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。 その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。				
授業のねらい・到達目標	１．幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。 ２．幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。				

授業の方法・授業計画

1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）
2	教育現場とアーティストの関わり①―子どもの育ちに関わる意味と可能性について(安村)
3	教育現場とアーティストの関わり②―共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション(安村)
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート―実践記録を読む(安村)
5	表現する身体：表現とプロセス、作品―実践記録、論文を読む(安村)
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）
9	子どもと音環境（斉木）
10	子どもとうた（斉木）
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる(斉木)
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）
13	文化と子ども（斉木）
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション（安村・斉木）
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）
期末	

授業に関する連　絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。
評価方法及び評価基準	授業内での発言（20%）、プレゼンテーション（40%）、レポート（40%）などを基に総合的に判断する。
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。
テキスト	特になし
参考文献	『松本千代栄撰集２人間発達と表現』舞踊文化と教育研究の会（編者代表：安村清美）編、2007、明治図書 『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館 『子どもたちの創造力を育む―アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会 『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会 『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社